

わがまち紹介



小山市

すべての市民の
ウェルビーイングの実現のために

田園と都市の魅力が調和したまち

小山市は、1954年3月31日に小山町と大谷村が合併して誕生し、2024年3月31日に市制施行70周年を迎えました。誕生時、現在の市域の人口は約8万3千人でしたが、現在は約16万6千人に増え、この70年間で倍増しました。この間、2005年に人口16万人を超え、宇都宮市に次ぐ県下第2の都市となりました。

本市がここまで発展したのは、充実した交通インフラが要因の一つとして挙げられます。鉄道は、東北新幹線で小山駅から東京駅まで約40分、宇都宮線などの在来線でも東京駅や新宿駅まで80分から90分程度で行くことができます。宇都宮線のほか、本市と茨城県や群馬県を結ぶ水戸線、両毛線が通り、東西南北の交通の要衝となっています。道路も、国道4号と新4号国道が南北、国道50号が東西に通り、首都圏や北関東を結んでいます。

こうした地の利を活かして工業団地の造成を進め、進出企業の従業員に住んでもらうために土地区画整理事業を広範囲に行ったことが、人口増加の要因になっています。

本市は、もともと旧日光街道の宿場町、農村でしたが、工場の集積にともない商工業が盛んになったことで、農商工のバランスのとれたまちになりました。

このように都市としての発展を続けながらも、市街地の周辺は現在でも農地や平地林が残っており、市の中央部を流れる思川や東部の鬼怒川沿いに豊かな田園風景が見られるなど、自然環境と都市環境の良さを併せ持っているのが本市の魅力です。

市の南西部、市内を流れる思川の下流にある渡良瀬遊水地は、国際的に重要な湿地の基準に該当するとして、2012年7月にラムサール条約湿地に登録されました。



渡良瀬遊水地

株式会社筑波銀行
小山支店長
若杉 智宏

小山市長
浅野 正富 氏

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとのつながりを深めるべく取り組んでいます。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。今回は栃木県小山市です。筑波銀行小山支店長 若杉 智宏が小山市長 浅野 正富氏にお話を伺いました。

また、環境にやさしい農業の推進などによる採餌環境の整備に取り組んだ結果、2020年から5年連続で国の特別天然記念物コウノトリの繁殖が確認されています。

わたしは市長就任時から、こうした本市の田園環境と都市環境のバランスのとれた魅力、独自性を表現する言葉として「田園環境都市」を使用し、そのバランスの維持をまちづくりの基本に据えています。

市民との「共創」による まちづくり

「田園環境都市おやまビジョン」

2005年に県下第2の都市となってから来年で20年になりますが、胸を張って「第2の都市だ」というためには、もっとやるべきことがあると思っています。

本市では2022年度から、市制100周年の2054年に向けて30年後の本市のありべき姿(ビジョン)を描く「田園環境都市おやまビジョン」の策定を進めています。その目的は、全ての市民のより良い暮らし、「ウェルビーイング」を実現できるまちづくりを進めることです。

幅広く市民の意見をビジョンに反映させるため、市民委員で構成される「おやま市民ビジョン会議」を立ち上げました。本会議のもと、まちづくりに関する市民の学びや意見交換の場として、セミナーやワークショップを継続して開催しています。

また、市内11地区それぞれの独自の文化や歴史、課題等を発見するために「風土性調査」を行っています。各地区の方に自身の住む地区についてより良く知ってもらい、それぞれの30年後のありべき姿を描いてもらうことが目的です。各地区のありべき姿を合わせることで、市全体の未来像が見えてくると考えています。

地区別に加え、分野別の30年後のありべき姿も整理しています。各地区を縦糸、各分野を横糸として、一つの織物となるように本市の将来ビジョンを描いていくというイメージです。

市民がまちづくりに積極的に参加

本市には代々農業を営んでいる方や工業団地進出企業での就業のために移り住んできた方など、多様な背景を持った方がいらっしゃいます。それぞれに交流したいという希望を持っていても、これまで行政側でうまくつなぐことができていませんでした。

わたしは市長になる前から、行政がうまく民間と行政、民間同士をつないでいければ、いろいろなこと、本当に意義のあることができるのではないかと考えていました。そこで2020年に市長に就任した際に、「徹底した市民との対話と連携」という公約を掲げました。

市長と市民がまちづくりについて意見交換を行う「市民フォーラム」においては、多くの市民が行政と市民、

市民同士で意見を交わしたい、交流したい、共感したい、つながりたいという意識を共有していたため、回を重ねるごとに自然に意見交換できる関係性が生まれてきました。

市民フォーラムは、市民の運営委員と市の職員が役割分担しながら運営しています。率直に意見交換しながらより良い方策をいっしょに考えるなど、「協働」することが当たり前になってきました。

まちづくり関連のワークショップに参加する年齢層も高校生から高齢者と幅広く、1つの議題で盛り上がり、「もう少し話をしたかった」「楽しかったね」と言ってくれる方がほとんどです。市の職員も市民と意見交換することで、いろいろな新しい発見があると聞いています。

これからは「市民との共創」、共に小山市の未来を創るような形で、関係性をさらに発展させていきたいです。



市民フォーラムの様子

小山駅周辺の全体ビジョンづくり

小山駅の周辺では、商業ビルの空洞化や空き家、駐車場の増加がみられる一方で、再開発事業により高層ビルが建設されているといった状況があり、このままでは都市空間としての魅力が失われてしまうのではないかと危惧がありました。

そこで、駅周辺を点ではなくエリアとして捉え、どのようなまちづくりを行っていくことが望ましいか、市民と意識を共有しながら、全体的なビジョンのなかで再開発などを進めていく必要があると考え、駅周辺全体のまちづくりプランをつくることになりました。

市民からはソフト面で多くの要望が寄せられ、ほかの地域との差別化を図るため、まちの中心として人が集う機能を持たせようという議論になり、広場やコミュニティ施設が求められていることが分かりました。

議論を重ね、プラン推進組織の市民メンバーを中心にビジョンを取りまとめ、2023年5月、小山駅周辺エリアが2054年までに目指す姿をまとめた民間の長期まちづくりビジョンとして、「PLAN OYAMA(プランオヤマ)」が発表されました。

まちづくりの目標を「EVOLVING GOALS(進化していく、進化し続ける目標)」として「居住」「仕事」「遊び」「交

通」など9つのテーマごとに掲げ、優先的にアクションに取り組むべき9つのスモールエリアの将来イメージを作成しました。

2023年12月には、市とプラン作成の中心を担った民間団体「PLAN OYAMA プラットフォーム」が、密接な連携のもとに長期にわたり継続してプランを推進し、小山駅周辺の持続的な発展に寄与するために必要な項目を定めることを目的として連携協定を締結しました。

「田園環境都市おやまビジョン」など行政計画と連携を図り、民間と行政が共通のビジョンのもとで“自分ごと”としてまちづくりに取り組むためのツールとしてアップデートを繰り返し、柔軟に活用されることを期待しています。



祇園城エリアの将来イメージ(「PLAN OYAMA」から)

市民生活を豊かにする 新しい取り組み

2024年度は、「市民皆さまの生活が豊かになる事業」の一つとして、間々田地区に保育所を新設します。建設から40年以上が経過し老朽化が著しい間々田北、網戸の2か所の公営保育所を統合し、2026年4月を目途に「子どもたちや地域の人々にとって心のよりどころ」となる新たな保育所を開設する計画です。

建物は、間々田地区に伝承される祭り「間々田のじゃがまいた」をモチーフにしたデザインを採用します。「間々田のじゃがまいた」は国の重要無形民俗文化財に指定されており、地域住民の誇りであることから、地域の拠点となる施設にふさわしいデザインと考えています。核家族の夫婦だけでは子育てが難しい状況のなか、地域が子どもを育てるような、地域に開かれた保育所を目指すことで、これからの保育所のあるべき姿を具現化するような場所になることを期待しています。

また、市民から要望の多い「おーバス」のサービス拡充を進めます。「おーバス」は現在、市民の移動手段を確保するため、民間バスの代替交通手段として各地区で運行し、路線のない地区はデマンドバスで指定

した施設、乗継拠点やバス停へ行く制度を運用しています。

「市民フォーラム」や「田園環境都市おやまビジョン」の意見聴取の際に、免許を返納した高齢者や児童・生徒の通学、塾・習い事への送迎など、さまざまな場面で市民が公共交通を利用していることが分かり、市が想定していた以上に充実へのニーズが大きいことを認識しました。そのため、大幅な拡充策の検討を進めています。

老朽化した車両の更新はもちろん、おーバスを補完するタクシー割引の実施、デマンドバスにAIを導入して利用しやすくするなど、最適な組み合わせにより市民にとって使いやすい制度にしていきます。

おーバスの例からも、市民からの要望は直にいろいろな機会、場所で聞かないと分からないことが多いと実感しています。

教育の分野でも継続して取り組んでいる制度があります。学校選びをより自由にするために、中学校で「隣接校希望選択制」を採用し、生徒の通学利便性の向上や希望する部活動への参加を可能にしています。

また、小学校では「小規模特認校制度」により、小さな学校で学びたい、子どもを学ばせたいという希望者に対して、通学区域にとらわれずに一定の条件のもとで入学・転学を可能としています。

小中学校でも高校のように選択の自由度を高めてほしいとの要望も多くあり、今後の検討課題の一つとして考えています。



おーバス

筑波銀行に期待すること

本市は、2023年10月にカーボンニュートラル、自然との共生を目指す「小山市ゼロカーボンシティ&ネイチャーポジティブ宣言」をしました。現在、この取り組みを推進するプラットフォームに市と約60社の企業などが集い、どんなことができるか意見交換しているところです。

いろいろな事業をやるうえでお金の問題も当然出てきます。筑波銀行さんにも金融機関としてぜひこのプラットフォームに入っていただき、いっしょに取り組むを進めていけたらと思っています。(10月17日入会)

(取材日:2024年9月20日)



40以上もの工程をすべて手作業で行う伝統的な絹織物。2010年にはユネスコ無形文化遺産に「結城紬」が登録されました。小山駅西口ロブレビル1階には「おやま本場結城紬クラフト館」があり、伝統の技を身近に感じることができます。

本場結城紬

小山市



わがまちの特産品



間々田ひも

手で丹念に組み上げて作られる日本古来の紐。古来では、武士の冑の緒や下げ緒などとして愛用されていました。現在は帯紐、羽織紐、ループタイなど多種多様に用いられています。草木染ならではの落ち着いた色合いが魅力。

甘みとうまみのある黒毛和牛。牛肉のランクで3等級以上のもので、「おやま和牛」と名乗ることができます。稲わらを食べ育てられており、小山市内の広大な水田から生産される稲わらが、健康な牛を育てています。

おやま和牛



小さな自慢が山ほどあります

このコーナーでは、「支店長のわがまち紹介」で取材させていただいた市町村の施策や事業、取り組みなどを紹介しています。

ハトムギ



ビタミンB1、B2やミネラルなど、たくさんの栄養を含んでおり、小山市は全国有数の生産量を誇ります。小山市産「ハトムギ」を使用した加工品も多く作られ、道の駅思川などで購入することができます。

ラムサール
ふゆみずたんぼ米



ラムサール条約湿地に登録された「渡良瀬遊水地」の周辺水田で、冬に水を張る農法によって農薬や化学肥料を使用せず作られたお米(コシヒカリ)。「ふゆみずたんぼ」はコウノトリ等の生き物の生息環境作りにも貢献しています。